

## 編集後記

踏査 11 号から 14 年、40 年史から数えても 10 年もの間、部の活動を部外に向かって報告することを怠っていた。文化会に所属する探検部には、活動を行うだけでなく、一定期間を区切り、その間の活動を振り返ること、また、その活動を支えたポリシーを表現することが必要だ。関大探検部の部報「踏査」は、そのような役目を負って号を重ねてきた。この「踏査 12 号」は、過去の「踏査」に比べて、急ごしらえで掘り下げも広がりも足りないものとなってしまったかと、反省している。しかし、10 年以上の空白を破って発行したこの 12 号に意味が生まれるとすれば、それは 13 号が現役部員たちの手によって、発行される時だ。

今回、現役主将として、「踏査」の「と」の字さえ知らない中から、12 号発行に尽力した 50 代の塚本、そして、51 年目からを担う現役部員たち。しっかりと「踏査」の伝統を再び部内に根付かせてほしい。頼んだぞ。

さて、小生の入部した 14 年前、世はアウトドアームだった。同期は 10 名で外苑合宿を迎えた。そして、今。部員は 1-4 回生を全て合わせて 7 名に過ぎない。この貴重な 7 人、探検部のドアをノックするという、ひとつの腹決めをしてきた後輩たちだ。得体の知れない探検部のドアをドキドキしながら叩いた人間。これは「探検」という言葉に惹きつけられる資質の持ち主なのだと思う。50 年の部の歴史の中で変わらないものだ。

しかし、「探検」という言葉、実体として捉えるのは益々難しくなった。解釈に幅を持たせないと、「探検」を看板に抱えている部の人間として、背負いきれなくなっている。今回、現役の君たちにわざわざ古臭い「探検」という言葉を考えてもらった。惹きつけられたもの、それは淡いイメージだったのだろう。そのイメージを自分なりの言葉にし、部活動のバックボーンにする。それも「踏査」の持つ意味合いのひとつだ。

今どき、「探検とは？」を肴に酒を飲むなんてことはないのだろうか。最初に、君たちから受けた原稿は、それまでの思考の蓄積がほとんど感じられないものだった。1 度、2 度、時間をおいて書き直し、書き足しさせることになった。まだまだ足りない。しかし、今というタイミングで切った君たち自身の記録はこうして残った。もう締め切りもない、無限にできた時間で一所懸命君たちの看板「探検」について考えほしい。そして、歩き続けてほしい。早急な答えを求めないでいい。「探検部とはやりたいことをやる部」だと、そこで考えを終えないでほしい。思考は、やがて「やりたいことはなんなのか」に必ずかえってくる。やりたいことをこの部でやるのはそれからだ。ルールを知り、見る目を養い、筋を通し、勇気をもってチャレンジすべきだ。やりたいことを、好きなことを原点に、何を深化させ、そしてパイオニアたらんとするか、その観点と行動に関大探検部らしい凄みを感じさせる、そんな企画を待っている。

田口(38 代 OB)

踏査 12 号 69